

## 『読むことのアレゴリー』と倫理の問題／「エコノミーにおける転換」

大田信良

### 1 ポール・ド・マンと倫理の問題

ポール・ド・マン『読むことのアレゴリー』によって批判的吟味される「倫理の可能性」は、道徳の問題とは明確に区別されている、なによりもまず、このことが確認されなければならぬのではないか<sup>①</sup>。そういう観点から取り上げてみたいのが、ジャン・ジャック・ルソー『新エロイズ』というテクスト。

ここでは、読むことをめぐる倫理性が、ヒューマニスティックでリベラルな(?) トニー・タナー『小説における姦通——契約と違反』あるいはキリスト教的で保守的なドニ・ド・ルージュモン『愛について——エロスとアガペ』にみられる解釈や価値評価とは異なるものであることは言を俟たない。主題上では、

たしかに、父権的な父の名に抗い違反するような情念にかられた恋愛としての姦通のイメージが、身分・地位や土地・財産の継承にかかわる契約としての結婚と二項対立をなしているようにみえないでもない。ただし、そのような愛が、より適切には、(いつもすでに脱修辭化をとまなう)愛の修辭的比喩形象・フィギュアが、恐怖・憐憫・自由とともに構成する情念こそがこのテクストの構造の決定・規定要因となっており、ここでそのテクストが舞台にかけ表象するのは、たんに、富と階級の社会的不平等あるいは暴君的な父の気まぐれに起因する、落涙をもよおすセンチメンタルな悲劇的状况だけでない<sup>②</sup>。それは、いかさま師とともに娼婦や私生児をたとえばバリに増やすような、田舎と都市の対立を裏舞台とする人口問題でもあったのだ。

「政治制度の結果を強化する偏見と世論は、このようにして各国の住民を国土のいくつかの地点に寄せ集め積み上げて、それ以外の土地を荒無地に砂漠になるにまかせる。このようにして首府を華々しくするために諸国の人口は減少する」(ルソー『28)。

とはいえ、主体や意識とその対象や自然・他者との間に存在する、言語に起因するとされる困難、解説・理解することの不可能性と密接にかかわる倫理の議論は、もっぱら実践的理性の叡智にかかわる類のものとも、まったく別物である。『新エロイズ』の「第2の序文」においてすでに、のちに取り上げるいわば修辭的疑念をかかえた「批判的モラリスト」たるルソー——姦通や不倫にかかわることで陥ったセンチメンタルな悲劇の状況のもとお決まりの主人公となるジュリのようなキャラクターについて、あるいは、その指示対象のステイタス・指示性(referentiality)について、「彼女たちは、仮に存在したとしても、もう存在しないのです」(ルソー『41)といった言説を織り込むなど単純な意味を表現することを回避するルソー——とは差異化される、「実践的叡智の人」であるルソーはなるほどたしかに、提示されている。この後者のルソーは、この本が結果として社会の読者たちにとって有用(useful)でありたいという欲望を素朴なかたちであらわにしている、そして、少しば

かり注意しておいてよいことだが、きわめて実践的で功利主義的な表現を使用して、次のように述べていることだ。「自分の言いたいことを有用なものにするには、まずはそれを役立たせる人に聞いてもらわなければなりません」と(De Man 207)、あるいは、「人に役に立ちたいと思うなら田舎で読んでもらわなければならないのだ」(ルソー『33)等々。

ド・マンによれば、『新エロイズ』のある無視すべからざる部分において、倫理と共存しつつも異なるものとして区別された道徳性・「道徳的」であることは、功利主義の言説に属していることになる。つまり、ルソーのテクストは、たとえば、快・不快といった単位にもとづいて数量化・数値化できるとされる幸福へと人びとが生活する社会全体を導く有用性・効用によって、価値あるいは意味というものを理解・把握する功利主義の思想が、啓蒙主義以降の資本主義世界とりわけヨーロッパにおいて勃興・台頭しつつあった歴史的契機・瞬間を印しづけている、ということか。こうしたことも、言わずもがなのことではあるが、一応、復習しておいてもいいかもしれない。そのような思想または実践的理性の働きによって特徴づけられる道徳性は、英国の場合でいうならサミュエル・リチャードソンの感傷小説やそのセンチメンタリズムとも、そしてまた、スコットランドの啓蒙主義たとえばデイヴィッド・ヒュームやアダ

ム・スミスのモラル・センチメントとも、異質のものであることはいうまでもないだろう。「神の見えざる手」が働き悪徳の追求が社会における徳あるいは公共善を産み出す資本主義の市場を補足する道徳的感情としての共感や市民たちの間に相互に結ばれるはずの絆・人間的な共同体・協働体とか、性善説——自然の秩序と対応・呼応すると想定される人間の本性(nature)が善であるという考え——とかといったものは、むしろ対照的に、文明化された社会における一種の性悪説や墮落の歴史観に立つルソーの道徳的説教や教訓話は、提示されているのではないか。さらにまた、啓蒙主義・古典主義からロマン主義への進展の途上に主題化・問題化されたセンチビリティの思想や文学とは別に、19世紀ヴィクトリア朝以降に善・悪(good and evil)という二項対立によって構造化され階級イデオロギーとして機能した2つの物語類型「センチメンタル」・「メロドラマティック」が孕んでいた道徳と、そして、そうした道徳の束縛からの感情・情動を武器にした解放であるかにも似た19世紀末のセンチショナリズムや煽情小説とも、ルソーの功利主義ともいべきものは、差異・区別されなければならぬ<sup>10)</sup>。

倫理と読むこととの関係について本格的に論じる前に、ここで少し立ち止まり、「読むことのアレゴリー」自体について、

ド・マンが述べていることを、確認しておくのも無駄ではないだろう<sup>11)</sup>。まずとりあえずは、イデオロギーの形式分析としてもとらえることができる脱構築批評・「理論」は、理論的に理解・判断することにかかわるのみならず選択・決定をともなう実践・行為を突き動かすものとしても提示されている、読むという行為は、たとえば、政治的・経済的の制度を「転倒」する変化や変革にも通じる法的な次元・審級と分かちがたく結びついていることが、次のように、示されていたのだから。

『信仰告白』のようなテキストは、根本的に相容れない一組の主張に行き着くという意味で、字義どおり「読解不可能」と呼ぶことができる。と同時にまた、この一組の主張は、たんに中立的で事実確認的な(constative)陳述・言明などではない、換言すれば、それらはたんなる言明・言表から行為へと移行するよう要請する勧告的な遂行行為(performatives)なのだ。それらはわれわれに選択を迫りつつもいかなる選択をしようともその基盤を破壊してしまう。こうした主張・陳述は、その判断力が確か(judicious)でもなければ公正(just)でもありえないような裁判による決定(a judicial decision)のアレゴリーを語っているのだ。……そこで決定された評決・判決は、自らが有罪として宣告した罪を、

自らも反復している。(De Man 245)

ルソーの教育論とされるテキスト『エミール』のなかに宗教的なサブテキストとしてかつまた脱構築的に主客転倒を引き起こす入れ子構造を思わせるようなやり方で挿入された『サヴォワの助任司祭の信仰告白』について読みの行為をおこなったド・マンが明らかにしたのは、「読むことの不可能性」をあまり軽々に受けとめてはならない(De Man 245) ということだった。

「読むことのアレゴリー」についてのド・マンの説明は、さらに、このテキストを読む読者とその意味・機能との関係にかかわる。一方で、文明が進歩してしまえば、市民や社会の墮落(マナー・ファッション・無駄話に耽溺する社交界あるいは姦通・不倫)を引き起こすように世俗化してしまった世界に毎日の生活を送りながら、有神論への改心をしかるべく説得的に誘い促す『信仰告白』を読んで、その後、実際に改心してしまうような読者は、知性の法廷から愚行の罪を宣告される。他方、信仰(Delief)——あるいは、世俗化された世界におけるなにかを神であるかのごとくとらえる信念や信用——などというものは、さまざまな偶像崇拜やイデオロギーの形式を内包するような場合を含め、啓蒙された精神があれば、永久に、乗り越え

ることができるのだと結論づけるなら、そのような読みや理解は、最終的に批判し乗り越えたと思うこと自体が信仰・イデオロギーの犠牲となっていることを認識できていない分、改心した場合よりも、ますます愚かということになってしまう。

『信仰告白』というテキストは、一般に想定されるような有神論的な文書でもあるし、そうでもない、それは、別の言い方をすれば、このテキストが、そこで宣言していると思われる信念の単純な否定などではないのだ。そうした信念が、最後には、必然的に生じることを反駁不能なやり方で明らかにするルソーのサブテキストは、だが同時に、そのような信念が逸脱的なものであると非難している。このような意味で「読解不可能(unreadable)」と字義どおり呼ばれうるこのテキストは、まさにこの特異性によってこそ、たんに中立的で「事実確認的な(constative)」陳述・言明などではなく、「たんなる言明・言表から行為へ」と移行するよう要請する「勧告的な」「遂行行為(performatives)」としての意味・機能をもっている、絶え間なく次から次へと反復をともないながら、「裁判による決定(a judicial decision)のアレゴリー」とは、このように読むことの不可能性を明らかに強いながらもまさにそのことによって勧告するような言語の「遂行行為」として機能しているのであり、かつて一般に流布してしまっただよように思われるいわゆる「記号

の戯れ」やその手の記号論的な「ノンセンス」論とは異なるものなのだ。このように、ド・マンのいう「読むことのアレゴリー」とは、イデオロギーの形式分析をきわめて厳密にかつ明確に実践することによって解釈され提示されたテクストの意味の働きや作用のことにほかならなう(De Man 245)。

ひょっとしたら、『読むことのアレゴリー』の脱構築批評は、たんなる「主体化」のイデオロギーの解釈とは異なる、意識・主体や倫理の問題には還元されない後期資本主義の金融資本と市場のイデオロギーの形式分析としてとらえられるべきものかもしれないのであるが、それはひとまず置くならば、倫理と「読むことのアレゴリー」の問題は、どのような関係性を、結局のところ、もつことになるのか。別の言い方をすれば、「真・偽という範疇」との相同的な結びつきが断ち切れ区別された「正・誤(善・悪)」という価値」にもとづく倫理的評価・判断の問題は、文学的・心理学的なものとの関連において、あるいはそれ以上に、政治的なものや宗教的なものとの関係において、いったいどのように解釈することができるのか。2部構成からなる『新エロイズ』を論じた第9章は、テクストのフレームとなる「第2の序文」やその要となる第1部を締めくくるジュリの手紙に注目しながら「倫理的な価値評価の発生」(De Man 220) または「法的・道徳的権威の起源」(De Man

224) を説明しているのであるが、後半部で、長々と描写されるクラランの共同体の政治的諸相とジュリの最後の手紙文における宗教的考察の関係については、十分な読みの行為にもとづく答えが、この段階ではいまだに提出されていない。もしも、政治的な混乱の「文学的な」昇華によってルソーを解釈・診断したルイ・アルチュセールの方向性で論を進めてみるなら、「ルソーの著作の宗教的な側面を心理的・政治的な諸矛盾の抑圧あるいは昇華から生じるイデオロギー的な上部構造として考察することも可能だろう」(De Man 224)、当然のことながら、『新エロイズ』・『エミール』・『社会契約論』といった主要テクストでは、緊密に絡み合っている宗教的な要素と政治的な要素の関係性は決して平穏なものでも単純に理解可能なものでもないとなすド・マンの提案は次のようなものとなる。なるほどたしかに、現代の読者にしてみるならば、『新エロイズ』のような虚構的テクストと『エミール』・『社会契約論』のような理論的テクストはまったく結びつかない異質なもので、たとえば前者の場合で確認したように不倫・姦通のテーマと分かちがたい政治制度の議論が宗教的・神学的考察と緊密な相互関係があることが明らかであったとしても、各テクストの主題や「意味」は、それぞれ、倫理的、教育的、政治的と呼ぶことに落ち着くのが自然のように思われるかもしれない。しかしながら、

このように分断化・断片化するわち物象化されることによりそれぞれのテキストにおいて多種多様かつ複雑に主題化 (thematization) された諸主題・「意味」も、修辭的構造・レトリックの観点から読みの行為を實踐するならば、それぞれの差異や異質性は區別することはできない、ということになる (De Man 246)。

## 2 「エコノミーにおける転換」と「倫理的」

さていよいよ、ド・マンの「読むことのアレゴリー」あるいは「読むことの不可能性のアレゴリー」(allegories of the impossibility of reading) が問題化した倫理とは、いかなるものだったのか、確認することにしよう。あらゆるテキストは、「読むことの不可能性を物語るアレゴリー」<sup>(24)</sup>、あるいは、「誤読」(＝脆弱な誤読の駆逐を祝福する挑発的な理論としての強力な誤読) としてとらえられねばならぬとするなら、ド・マンのタームである「アレゴリー」にはあらゆる言語に内在する宿命的機能が言及されているつまり言語は常に自らとは別のものを指示せざるをえずしたがって言語の意味は決定的な意味に達することなく永久に差延されるとするならば、「倫理的」というタームのほうは、どのようにとらえられるべきだということのか。

「アレゴリーはつねに倫理的であるが、倫理的という術語が指示しているのは、二つの異なる価値体系 (真・偽 (truth and falsehood) をよび正・誤 (right and wrong) とする二つの価値体系) の「構造的な相互干渉」である、そして、この意味での倫理は、主体の意志 (挫折したものであれ自由なものであれ) とはなんら関係のないものであり、まして主体間の関係とはなおさらかわりのないものである」(De Man 206) とド・マンは述べていた。本論ですでに論じたように、『新エロイーズ』を読む行為を實踐しながらド・マンが論じているのは、主体と言語との関係に存するのは別のタイプの倫理である。

繰り返しになるが、また、ド・マンとともに、『新エロイーズ』『第2の序文』に立ち返り、Nとの対話のただなか、作者ルソーであってルソーでないRが、自身のテキストを「読むことの不可能性」を認めることによって、テキストの意味に対する支配力を放棄する契機に、注目してみよう。こうした告白は、これまですでに物語の展開を活気づけてきた本来備わる論理に抗うものであり、そうした論理ひいては分節化された物語の展開を自ら脱構築的に「脱分節化 (disarticulate)」する瞬間ともなっている (De Man 206)。「こうした反転は、語り手の関心・利害に反するように思われる。それは価値評価の転換

(shift) を含意するような犠牲あるいは断念として主題化されなければならぬからだ」(De Man 206)。反転以前の真・偽という二極性によって支配されたシステム内で生起し価値体系と物語が、互いに衝突するどころか、相互に協働しながら進行してきた『新エロイズ』第一部における情念の物語とはまったく異なるかたちで、この読解不可能性のアレゴリーの場合には、真・偽に対する要請は物語を論理的に構成するはずのシンタックスと対立しそれを裏切るかたちで姿をあらわす。

ここで起きているのは、「真・偽という範疇」と「正・誤という価値」の結びつきが断ち切れ、「語りのエコノミー」が決定的なやり方で作用を受けている事態にほかならない(De Man 206)。そして、「バトスからエトスへの転位(displacement)」にかかわるような「このエコノミーの変化(this shift in economy)」こそ、ド・マンが「倫理的(ethical)」と呼んだものであった(De Man 206)。「アレゴリーはつねに倫理的である」とは、まさにこのような意味であることを、確認しなければならぬ。この倫理性とは区別された、「道徳性」とは、「人間」・「愛」・「セルフ」といった観念を産み出したものと同じ言語的アポリアのひとつのヴァージョンにすぎず、そうした諸観念の原因や帰結などではない。「倫理的な調性への移動」は、「言語的な混乱の、指示的な(つまりは信頼できない)翻

訳版」にほかならない。こうして、ド・マンの「理論」において、「倫理(あるいは倫理性というべきか)」とは、数多ある言説形式のひとつなのである(De Man 206)。

倫理的というタームが指し示しているのは、2つの異なる価値体系すなわち真・偽および正・誤という2つの価値体系の間の「構造的な相互干渉」であったわけだが、さて、あらためてこの2つの価値体系あるいは次元・レヴェル間の「構造的な相互干渉」とは、なんなのか。ド・マンの「読むことの不可能性のアレゴリー」という「理論」においてそれはどのような意味をもっているかわれわれはとらえたらよいのだろうか。その脱構築批評の実践が、実のところ、後期資本主義の金融資本と市場のイデオロギーの形式分析を試みたものであるとしたならば、われわれは、たとえば、ほかの批評家のどのようなサブテキストとともに、ド・マンの理論的テキストを、いまあらためて、読み直すべきか。

この問いに応答すべく、本論がそうしたサブテキストとして提案してみたのが、フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識』である。その第1章「解釈について——社会的象徴行為としての文学」において、ジェイムソンは、ド・マンの脱構築批評の実践をあるやり方で「誤読」することにより、アルチュセールの「構造因果性」を新たに書き換えたのではないのか、

このような可能性を探ってみたいのだ。「なぜアルチュセールが構造的全体性を執拗に主張したのか、その理由がみえにくくなる。なるほど、アルチュセールが力説しようとしたのは、各レヴェルが最終的には構造的に相互依存の関係にあるということだったのであるが、彼がこの相互依存関係を把握しているのは、構造を経由した媒介 (a mediation that passes through the structure) であって、ひとつのレヴェルが別のレヴェルにそのまま折り込まれてしまうようなより直接的な媒介 (a more immediate mediation) ではないことは、だれの目にも明らかだ。となると、構造因果性というアルチュセールの概念の哲学的意味合いとは媒介概念そのものではなく、弁証法の伝統のなかで再帰性なき直接性 (unreflected immediacy) と呼びならわされてきたものを攻撃することらしいとわかってくる」(Jameson 41 斜字体 ジェイムソン)。このように、スタロバンスキーの媒介なき直接性の概念を「読むことのアレゴリー」言い換えれば媒介の問題によって批判することで新たな批評的・理論的可能性を切り開いたド・マンと同じように、ジェイムソンもまた、次のように、媒介性についての思考——あるいはいはずれ構造のさまざまなレヴェルあるいは審級の間の「トランスコード化」・「翻訳」と言い換えられるもの——をアルチュセールの理論的仕事に突き付けているのがわかるだろう。ジェイム

ソンの書き換えによれば、アルチュセールが提示していた構造は、ある社会編制体におけるあらゆる要素を関係づけるのだが、各要素は各々その構造的差異と距離を介して関係づけられるのであって、それらの間の相同的な同一性の観点から関係づけられるのではない。この場合、差異は無関係な多様性をただやみくもに作り出すものではなく、関係性を発生させる概念としてとらえられている (Jameson 41)。

ジェイムソンがド・マンの「読むことのアレゴリー」を自身の批評理論である「政治的無意識」によって「誤読」することによって反復し生産した構造とは、具体的には、どのようなものだったのか。

グレマスにとっては、諸レヴェル間の構造的相同性——意味の四角形はこの相同性にのっとって自己再生産を続ける——として定式化されるべきものを、私たちは、それとは逆に、現前と不在の間の緊張関係に、つまり、すでに示唆したような、さまざまなダイナミックな可能性(産出、投影、代償、抑圧、転位)にのっとったかたちでマッピングすることができるとする緊張関係に、強力に組み換え再構造化するのである。(Jameson 48-49)

かくして、文学構造体は、諸レヴェルのどれかひとつに申し分なく実現されるのではなく、テクストの裏側・「思考されざるもの」・「語られざるもの」すなわちテクストの政治的無意識とまさにいべきものに強く引き込まれることを触知することとを可能にする、そのような認識見取り図をジェイムソンは理論化することになる。『新エロイズ』というテクストの要となる第1部を締めくくるジュリの手紙に修辭的に表象される、

本来は超越的な存在であるはずであるにもかかわらず、  
な形式や比喩形象によって内在化・内面化されている「神」、  
あるいはまた、ルソーという作者でありかつまた作者ではない  
語り手がその姿・フィギュアをあらわす「第2の序文」は、テク  
クストのフレームワークとなる最初の「序」とは異なり、テク  
スト本体が生産される途中に、その部分あるいは「部分の部  
分」として別のかたちで産出され、まるで、おまけあるいは代  
補として付加されることにより、テクストの全体構造自体を決  
定的なやり方でただし「読解不可能性」・「決定不可能性」を引  
き起こすように規定してしまうなどといったことを、ド・マン  
の脱構築的な読みの実践とともに省察するときに、傍らにおい  
て再読すべきなのがここで取り上げたド・マンの誤読を媒介あ  
るいは經由して再翻訳・移動したジェイムソンによる「構造因  
果性」の書き換えではなかっただろうか、われわれがおこなう

ことを要請されているそれらの諸テクストの間の「構造的な相互干渉」または「トランスコード化」という「翻訳」という読みの行為のために。

ド・マンが「アレゴリー」は常に「読むことの不可能性のアレゴリー」になっていると述べるとき、具体的な読みの実践としては、「第2の序文」のテクストと『新エロイズ』のテクスト本体との関係について言及していた。『序文』がそれによって紹介されるテクストの意味をこれほど明確にしてくれない例はめったにありえない。この『序文』はそうした非力さを無知の認識として主題化するが、今度はテクスト本体がそうした認識を疑問視しなければならなくなるだろう。『序文』はテクスト本体のために書かれたのか、それともその逆なのか、この時点で、それをわれわれがみきわめることは不可能である」(De Man 205)。このように、ウェイン・ブース『フィクションの修辭学』が提示した「信頼できない語り手」のような結局的のところ主体の回復を約束されているようなものとは根本的に異なる、語り手や物語の構造を論じたとき、そのような構造の修辭の様式は、「自己言及的」であると解釈されていた(De Man 205)。

ここで注意すべきは、生産の問題に関係してテクストを読むことについて述べられていること、すなわち、テクスト『新エ

ロイズ』の構造は、隠喩というひとつのチームあるいはそれに代わるいかなる一般的な文彩や比喩形象・フィギュアによってもとらえることができないのだが、にもかかわらず、その隠喩的な比喩形象の脱構築は、複雑な構造の決定要因となる諸テキスト（第2の序文」等を含む）の生産において、どうしても必要で欠くべからざる契機・瞬間として機能しているということである（De Man 205）。このようなテキストの構造においては、そこで生産される諸物語が自らのうえに折り返される、ちょうどテキスト本体という「全体」と「序文」という「部分」の間の複雑に倒立した「自己言及的」な関係性のようになり、構造全体の部分でありながら構造自体を、決して終わりがこないにもかかわらず最終的には、支配的規定要因として、決定的に作用している。「構造因果性」という理論によれば、狭義の経済的なものである下部構造が法・政治的審級その他の上部構造を反映論的に規定・決定するという単純な構造ではなく、複雑なひとつの構造全体の効果として、あるいは、最終審級としての経済的なものが「不在原因」として重層決定が作用する複雑な構造が考えられていたのだが、このような新たな因果性によってとらえ直された構造は、ド・マンが論じる「さらにより複雑な構造」への翻訳可能性を孕んでいるのではないか。

認識論的な厳密さという理由から、『新ロイズ』のテキスト本体と「序文」を並置すること）の（必然性をとはいわないまでも）権威を確認することを拒否することにより、ルソーは、読むことの隠喩を、脱構築的な物語として、その安定性を揺るがし、それをさらにより複雑な構造に置換する。テキストの範例はすべて、ひとつの比喩形象（もしくは比喩形象の体系）とその脱構築からなっている。しかしながら、このモデルは、最終的な読みによってすらも、打ち切りにされる可能性がないため、今度はそれが代補として機能する比喩形象の重層的な折り重ねを産み出すことになり、先行する物語の読解不可能性を物語ることになる。（De Man 205）

「アレゴリー」が、常に「読むことの不可能性のアレゴリー」になっているだけでなく、それと同時に、常に「隠喩のアレゴリー」でもあって、複雑な構造性において重層的な規定・決定を受けている、そして、最終審級における決定が超越論的であるように（とはいえ決して超越論的ではなく）終わりテロスに向けて存在しつつも決して閉じられることなく螺旋状に拡張的に展開・転回する歴史が舞台の上にかけられているのは、このような意味においてはほかならない。

ド・マンの「理論」が問題化した倫理の問題は、「真・偽と

いう範疇」との結びつきが断ち切られた「正・誤という価値」の意味作用にかかわるような、「エコノミーにおける転換」によって解釈されなければならない。言い換えれば、それは、これら2つの価値体系のレヴェル間の「構造的な相互干渉」あるいは結びつきが断ち切られ、「語りのエコノミー」が決定的なやり方で作用を受けている事態にほかならない (De Man 206)。<sup>6</sup>そして、「パトスからエトスへの転位 (displacement)」にかかわるような「このエコノミーの変化 (this shift in economy)」とは、テキストの主題や「意味」が、その全体性や歴

史性を失い、たとえば、倫理的、教育的、政治的といったように個別・特殊な区分に分断・断片化されるように主題化・物象化される状況を、修辭的構造・レトリックの観点から考察したものであった。別の言い方をするならば、『読むことのアレゴリー』というテキストあるいはその脱構築的な文学・文化批評の実践とは、<sup>7</sup>ド・マンの脱構築批評の実践をジェイムソンが強力なやり方で「誤読」し書き換えたアルチュセールの「構造因果性」によってとらえ直すべきなのだ。

## 註

(1) ド・マンの「理論」の倫理学化・心理学化をおこなったJ・ヒリス・ミラーの脱構築批評についてはかつて、批判的論評を加えながら、論じたことがある。大田『ダロウエイ夫人』における政治意識」をみよ。

また、脱構築批評をほぼ同時期には実践していたミラーは、『読むことの倫理』において、「読みにおける倫理的瞬間」は必然的に「社会的、制度的、政治的な領域に入っていく」のであるが、それは「政治的なものと倫

理的なものとはいつも緊密に絡みあっている」からだ、と論じている。「読むという行為に必然的に含まれる言語的な交渉に由来するパフォーミング能力が、知と政治と歴史の領域に流れ込んでくるはず」とするミラーの議論は、言語を媒介として主体の経験を語り読むという行為によって経験を検証していくという過程はともに倫理的であるという議論に、主体という心理学化されたカテゴリーを具体化して温存してしまいかねない議論に

陥っていたのではないか。『読むことのアレゴリー』をはじめとするド・マンの批評理論と倫理の関係は、これとはまったく別のやり方で、とらえられるべきだ。

さらに、このような倫理学化・心理学化に続くイデオロギー的な美学化の仕事について言及しておくなら、「アフター理論」の文学批評あるいは「理論」としての英国における新美学主義批評の勃興と展開、あるいは逆に、ド・マンの仕事をふまえたはずのスピヴァッ

クのシラー再解釈および美学教育の可能性の探求については、日本ロレンス協会第49回大会におけるワークショップ「オクスフォード英文学と冷戦期の／ポスト帝国日本の「英文学」——F・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件とは？」(二〇一八年七月一日於東北学院大学)に参加したメンバーのひとり、川田潤「文学と科学の対立を歴史化する」が、テリリー・イーグルトンの美学イデオロギー批判に対する新美学主義批評の側からと思われるマイケル・ベルの反論を、さらに批判的に吟味する作業を開始し、そのポイントを明確に論じるはずである。私大田および高田英和も参加したこのワークショップの成果は、今年度、『D・H・ロレンス研究』第29号に特集として掲載予定である。ここでは、大田は、直接的にド・マンを論じることはないが、ド・マンのそもそもの批評的実践であった博士論文においてその批判的ターゲットであったフランク・カームードのイデオロギー性や文化冷戦との関係を、日本の英文学者の仕事も含めて、論じることになるだろう。

(2) 「婦人の放埒の原因は彼女自身のなかにある」というよりもむしろわれわれの悪い制度にあるのだ。自然のあらゆる感情が極端な不平等によって抑圧されてからは、子供たちの悪徳と不幸はもっぱら父親の不正な専制から生じているし、両親の食欲とか虚栄心の犠牲になった若い妻が自ら放埒を誇りとし、それをも

って娘時代の淑徳の面目を消そうとするのは、強いられた釣り合わせ夫婦関係のためなのだ。悪を防止しようと思うなら、その源に遡らなければならぬ。国民の風俗についてなにか改革を企てなければならぬとすれば、まず家庭の品行から手を付けなければならぬが、それは全く父と母の意志次第なのだ」(ルソー：8)。

(3) さらに、たとえば、心理小説についてはブルースト「失われた時を求めて」を論じた第3章「読むこと」を、フロイトの無意識については『ピグマリオン』を論じた第8章「セルフ」を、それぞれ参照してみてもいいかもしれない。「読むことのアレゴリー」の第2部「ルソー」の前におかれた第1部「修辭」で、ド・マンが博士論文でも取り上げたイェイツに言及したあとで脱構築的な読み対象とされるニーチェやリルケ、とりわけニーチェ『悲劇の誕生』論が、モダニズムをカヴァーしているかもしれない。別のタイプのジャンル論によって、17世紀資本主義世界システムおよび啓蒙主義以降の歴史的過程をたどったジェームソンの『政治的無意識』第2章「魔術的な物語」と合わせ鏡にして比較するのも有益だろう(Jamson 193:50)。

(4) ボール・ド・マン「読むことのアレゴリー」は、いまさらいまでもなく、「読むこと」の研究・教育においてそしてまた批評・理論」の言説・制度において、前景化したもの

であったのだが、そのように読み行為をわざわざ取り上げてみたのは、たんに「文学的生産様式」や「作者の死」以降にそれに取って代わる読者論や消費の快楽を称揚してみたかったというのではないとするならば、そこにどんな意味があったというのか。『新エロイズ』または『ジュリー、あるいは、新エロイズ』第2部のエンディングの近くにおかれたジュリーの父ヴァルマルル氏から娘ジュリーがかつて愛したはずのサン・ブルーへの手紙を取り上げたド・マンは、そこに表象された見ることという知覚と媒介なしの透明性、そして、それと対極にあるその修辭的形象あるいは隠喩としての読むこととそれが神のような超越性と愛する人間たちの内在性の媒介として機能すること、これらに注意を促すことで、本格的な議論の開始を印しづけている。「ジュリーが神との遭遇を語るまさにその一節において、その遭遇は、透明性(Transparency)としてではなく、ひとつの隠喩によって、けして誰も読みたいと思わない、ような奇妙にも読みにくい、読むことの隠喩によって、記述されている。このコミュニケーションは、知覚という形式をとって生じるのではなく、『永遠の存在は……目にのみ耳にも語らず、心に語り給うのです』、その無媒介的と呼ばれうる接触が、感覚的な知覚にかかわらないものであるからのだが——、「読むこと」として生じる。つまり、この接触は媒介なしの直接

的な交流であり、『神とこの世に生まれて以来の私たちの考えを読み取り、今度は私たちのほうが来世で神の思し召しを読み取る、というの、私たちはやがて神と対面することになるからなのですが』(斜字体ド・マン)。この一節につけられた脚注は、さらに、動詞『読む』を強調している。『これは至言だと私には思われる。というの、至高の叡智を読み取るのでなければ、神と対面したところで何になるというのだろうか』。スタロバンスキーがいみじくもテキスト全体の要と考える活動は(とはいえ、ジュリはそれについて)

の注釈者ほどのものしく語ってはいないではあるが、読みの行為として、ルソーによって表象されている。この作品のあらゆる主題的な問題は、すなわち、愛、倫理、政治社会、宗教体験の間の関係、およびそれらそれぞれのヒエラルキー関係は、ルソーにとってその意味がけして透明でないひとつのターム(言い換えれば、『読むこと』の理解にかかっている。『読むこと』をめぐる問題規制について、『新エロイズ』はわれわれにいったい何を語らなければならぬというのか」(De Man 192-93)。

(5) ただし、このフレーズにある「風格の『(6) 自体、ひとつの隠喩として『読まれなければならない』(De Man 205)のかもしれない。そうした「読み」を実践した例を、『社会契約論』を論じた第11章「約束」ならびに『告白』を論じた最終章でもある第12章「弁明」に見出すことができるのではないか。また、グローバル化する文化におけるリーディングの問題を論じるなかで、ド・マンのルソー論を導入した大田「グローバル化する文化」も参照のこと。

## 引用文献

de Man, Paul. *Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*. New Haven: Yale UP, 1979.  
Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. Ithaca: Cornell UP, 1981.

Miller, J. Hillis. *The Ethics of Reading: Kant, de Man, Eliot, Trollope, James, and Benjamin*. New York: Columbia UP, 1987.  
大田信良「グローバル化する文化とリーディング」『東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学』53 (2002): 39-50.

———『「タロウエイ夫人」における政治意識——ウルフのスタイルへの意識』富山太佳夫編『現代批評のプラクティス——テキストストラクション』東京: 研究社 1997. 21-53.  
ルソー、ジャン＝ジャック『新エロイズ』1-4 安土正夫訳東京: 岩波書店 1960-1961.